

聖書:ルカの福音書1章39～56節

説教:主はあわれみを忘れない

はじめに

アドベントの第三週目を迎えております。このアドベントはイスラエルの歴史と密接にかかわりがあります。神はアブラハムを通して、あなたの子孫を祝福すると約束されたのに、イスラエルは神にそむき続け、あるときとうとう国は滅んでしまいます。それでも、神はイスラエルをあわれんでくださり、やがて救い主が遣わされるから希望を持って待ち望みなさいと語り続けます。

ところが、何年経っても救い主がやってこない。日本語に「待ちぼうけ」ということばがあります。待たされる時間が長すぎて、気持ちがぼうっとしてしまう、という意味だそうです。長い間待っても来なければ、諦めてしまう人もいます。たとえ諦めなくても、救い主を待っていたということを忘れかける人も出るでしょう。二千年前のイスラエルはそんな状態でした。待つということはそれほど大変なことです。ですから私たちは一年に一度、救い主を待ち望む思いを新たにさせていただく。それがアドベントの意味になります。

先週は、御使いガブリエルがマリアの所に現れ、「あなたは男の子を産みます」と告げたところを見ました。マリアはそれを聞いて、「そんなことありえないでしょう」と言って戸惑っていると、御使いはこう語った。「あなたの親類エリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六ヶ月です。神に不可能なことはありません。」

そう言われたマリアは、「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と言った所で前回は終わりました。今日はその続きです。

## 1 マリア

### 1) エリサベツの所へ急ぐ理由

39, 40節。「それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつをした。

どうして「急いで」向かうのでしょうか。親類のエリサベツが妊娠したことをマリアが初めて聞いたときは、不思議だなと思ったけれど、それ以上考えなかった。ところが御使いは驚くべきことを告げた。「エリサベツは神のみわざによって男の子を宿したのだ。マリア、あなたもおなじように神の力

によって男の子を宿すことになる。」本当だろうか。是非エリサベツに直接会って確かめておきたい。というのはマリアには切実な事情があります。マリアが妊娠することで、まずヨセフが大変なことになる。自分も夫以外の子どもを宿したということで、石打の刑で殺されることだってありうる。人の一生が左右される一大事です。だからエリサベツに会ってすっきり確認したいと先を急ぎます。

でもマリアには不安があります。エリサベツに会って何と切り出せばいいのでしょうか。もちろん、御使いが語ったことをそのまま伝えるつもりですが、それを聞いてエリサベツが信じてくれるかどうか。素直に信じてくれる保証は何もない。かえって誤解されるかもしれない。「あなたは自分の罪を隠そうとして、ありもしない御使いの話をしているのでしょうか。」「自分のお腹から救い主が産まれるですって?なんと大それた嘘をつくのか!」そう言われたら終わりです。マリアはエリサベツの家の玄関の前に立ちます。あいさつはしたけれど、その先が口から出て来ません。

### 2) エリサベツの励まし

もじもじしていたとき、41, 42節です。「エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で踊り、エリサベツは聖霊に満たされた。そして大声で叫んだ。『あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。』」

マリアは自分の身に起きたことをまだなにも告げていません。それなのにエリサベツは全部知っているかのようにこう言いました。「あなたの胎の実も祝福されています。」

エリサベツは、マリアがヨセフと婚約していることは、自分も親類の一人でしたから既に知っていたはずですが。婚約期間中の女性が妊娠するはずがありません。それが妊娠したとなれば大変なスキャンダルですから責められるのが普通です。マリアはそのことをずっと心配していた。ところが、驚いたことに、これ以上のない祝福をかけてくれて一緒に喜んでくれた。

### 3) 孤独だったマリア

マリアはそれまでずっとひとりぼっちでした。世界でだれも経験したことのないことが自分の身に起きようとしています。理解してくれる人がいると

は到底思えない。自分ひとりで耐えていくしかない。小さな身体で精一杯がんばっていました。そんなマリアを誰が励ますことができるのでしょうか。皆さんも経験がおありだろうと思います。経験したことのない人のことばは、心の深いところに届かない。けれども、同じような経験をした人は違う。マリアの場合、本当の励まし手になったのがエリサベツでした。この二人はともに、神の力をいただいて子を宿すという、同じ経験をしているからです。

ところで、マリアにとって一番ふさわしい励まし手がこんなふうに簡単に与えられるのでしょうか。話がうますぎる、と思うのでしょうか。その理由が41節にきちんと書いてある。「エリサベツは聖霊に満たされた。」マリアも御使いから言われていました。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」すべてのことに聖霊が働いています。だからこのようなことが起きる。

聖書の中の話だけではない。実際に皆さんもこのような経験をされているのではないですか。いつかそんな経験を集めて証し大会ができるのではないかな。そんなふうに思います。

## 2 マリアの告白

### 1) 私：大きなことをしてくださった

さて、安心してしばし泣いていたマリアは、気持ちが落ち着いてくると、今度は神をほめたたえはじめます。46節から55節はよく「マリアの賛歌」とも言われるのですが、そのなかからふたつのことを取り上げてみたいと思います。まず一つ目は49節です。「力ある方が、私に大きなことをしてくださったのです。」

「私に大きなことをしてくださった」とは、自分のからだを通して救い主がお生まれになることをまず指すでしょう。でもそれだけではない。いまエリサベツのことを見ました。マリアがこの重い任務を果たしていくために一人でがんばるのではない。聖霊が働いて、行く先々で神が助けてくれている。まるで奇蹟の数々を見させていただくようにして、こんな小さな者のために、神がここまでしてくださることに目を見張っています。それで、「力ある方が、私に大きなことをしてくださったのです」と告白します。

### 2) 父祖たち：語られた約束

でも続く54、55節の告白はどうでしょうか。「主はあわれみを忘れずに、そのしもべイスラエルを助けてくださいました。私たちの父祖たちに語ら

れたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」

49節で、マリアは「私」と言って自分のことに目を留めていました。でもそこで終わらない。こんどは「私たちの父祖たちに」と言って、今この身に起きていることは、イスラエルの歴史と密接に結びついていることに目が開かれています。

もちろん初めから全部見えていたわけではありません。御使いガブリエルから、神のご計画を聞かされたとき、マリアはどう反応したか思いだしてください。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」自分のことしか考えられない。当然と言えば当然でしょう。38節で「あなたのおことばどおり、この身になりますように」と言って、なんとか受けとめたけれど、内心は、これから自分はどうなるのだろうか、不安で不安でしようがなかった。イスラエルの歴史がどうのとか考える余裕はなかった。それが今、神が旧約聖書を通して語ってこられた約束を今果たそうとしているとわかってきた。そうできたのはマリアが特別に賢い女性だったからと言うことではなくて、やはりこれも聖霊の働きだと思うのです。

## 3 主

### 1) あわれみを忘れない：ヤコブの見た夢

そんなマリアは、「私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも（神は）忘れなかった」と言っていますが、いったいこれは何のことか。最後にそのことを確認しておきます。

「アブラハムその子孫」ということばを手がかりにしますと、何人かの名前が浮かぶわけですが、その中から創世記に登場するヤコブに目を留めてみます。アブラムの一人息子イサクは兄エサウと弟ヤコブという双子を産みます。ところがこの二人は非常に仲が悪い。ヤコブはあるとき兄をだまして父親からの相続権を奪い取ってしまうのですが、それが兄にばれてしまうと兄が怒り狂って弟を殺そうとする。それでヤコブは逃げ出してします。その逃げる途上で彼は一つの夢を見ます。その夢の中で主はこう告げたのでした。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。（中略）見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがたどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、

決してあなたを捨てない。」（創世記28章13、15節）

欲しいものがあれば、それを自分のものとするために、父親であろうとも平気で嘘をつき、力尽くで奪い取る。人がどんなに傷つくか、どんなに悲しむか、そんなことは自分には関係ない。かつてのヤコブはそういう生き方をしていた。どう考えてもひどい人間です。そんなヤコブがどうして神からこれほどのすばらしい約束をいただくのか、神は不公平ではないのか、不思議に感じるかも知れません。

## 2) 主のあわれみは、主を恐れる者に

ヤコブが夢から覚めたとき、彼はこう言います。

「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にはかならない。ここは天の門だ。」

（創世記28章17節）ヤコブはずっと神を知らない人でした。むしろ自分を神にしてきた人と言ってもよい。その結果、兄から殺されそうになり、今は野宿の身です。でも神に出会い、主を恐れることを知ったとき、彼は自分がどれほどひどいことをしてきたのかを振り返ることになります。ヤコブはその後いろいろな苦しみを通されていくのですが、やがて兄に会って謝罪するようにと導かれ、兄との和解を果たしていきます。これが主のあわれみです。

「主のあわれみは、代々にわたって 主を恐れる者に及びます。」マリアが言ったのはこのことでした。ヤコブが主を恐れていったとき、彼がどのように変えられたか。それを見ると神が不公平な方ではないと分かります。

もし主のあわれみがなかったなら、ヤコブは兄と和解できず、苦しみを抱えたまま死ぬしかなかったでしょう。私たちもおなじです。でももし主があわれんでくださるのならば、どうなるか。私たちは決して諦める必要はない。マリアは、神はあわれみを忘れないとわかったとき、救い主を待ち望む心を燃やされていきました。

私たちも同じように、主が再び来られる日を心を新たにして待ち望みたいと願います。